

徴税人ザアカイとイエス
—平和をもたらす者—

奨励	杉野 榮【すぎの・さかえ】
奨励者紹介	日本バプテスト連盟・京都洛西教会牧師

イエスはエリコに入り、町を通っておられた。そこにザアカイという人がいた。この人は徴税人の頭で、金持ちであった。イエスがどんな人か見ようとしたが、背が低かったので、群衆に遮られて見るができなかった。それで、イエスを見るために、走って先回りし、いちじく桑の木に登った。そこを通り過ぎようとしておられたからである。イエスはその場所に来ると、上を見上げて言われた。「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。」ザアカイは急いで降りて来て、喜んでイエスを迎えた。これを見た人たちは皆つばやいた。「あの人は罪深い男のところに行って宿をとった。」しかし、ザアカイは立ち上がって、主に言った。「主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します。」イエスは言われた。「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから。人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである。」

(ルカによる福音書 一九章——〇節)

本日は、初めて同志社大学のチャペルに呼んでいただき感謝なのですが、大変緊張しております。しかし、グリークラブの皆さんの素晴らしい賛美に力を与えられました。近く全国コンクールだそうです、どうぞ頑張ってください。

開拓伝道へ

一九六一年三月に神学校での学びを終えたわたしは、すぐに結婚、四月の半ばには京都に赴任して参りました。京都左京区にありますバプテスト病院を支援する教会を建てるように、との使命を受けての入洛でした。工業都市の北九州で育ったわたしたちは、千年を越える古都への知識もほとんどなく、京都駅のホームに降り立って、これからこの地でどれほどのことができるのか、希望よりも不安でいっぱいでした。実は今、あの日と同じような思いで聖書だけを手にしてここに立っております。

わたしは、バプテスト連盟に連なる小さな教会の牧師をしておりますが、バプテスト教会には、要理や使徒信条などがなく、皆さんと共通する信仰理解をもちあわせません。皆さんが見えてこないのです。先ほどからプログラムを見てホッとしておりますが、わたしに与えられた礼拝での責任は、説教(・・)ではなくメッセージとなっています。わたしたちの教会では「証言」となっています。「説き教える」ではなく、わたしに求められているのはキリスト証言だとの考えからでした。いずれにしても、これは話者と聞かす者の対話でなければならぬと思ってきました。ですから、本日のように存じあげない方々を前にして何をお話しできるのか迷ってしまいます。もう一つ、先日このお役目の依頼を受けました折に、ルカによる福音書から「徴税人ザアカイと主イエスの出会い」のことからお話しようと考えておりましたが、あとで本学の秋学期のテーマがマタイによる福音書五章九節「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。」との主題と知り、少々戸惑いました。相手が見えなければ、せめて自分のことだけでも先に知ってほしいと思い、これまでのわたしの歩みについて聞いていただきたいと思っています。

わたしが入洛、開拓伝道を始めたのは京都の西方、右京区花園にあります臨済宗妙心寺派の本山近くの空き地でのこども会からでした。のちにわたし共の住むアパートに近い洋裁学校を借りての成人の礼拝を守り、その二年のち、現在地に平屋の教会堂が建ち、献堂式が行なわれました。連盟からは一日も早い教会の独立が求められており、わたしたちは何もわからぬままに自立をめざして懸命な努力の日々でした。そのうちに他の教会の青年たちの協力もあり、六年目に自給独立し、教会組織をして京都洛西教会となりました。しかし、そんななかで平和を考えて行動していくことなど、当時のわたしたちには考え及ばぬことでした。それどころか、自分が住む京都の歴史さえ曖昧な認識でした。わたしは赴任するまで、京都は戦火に遭わなかった町だと信じておりました。そう教えられ信じきっていたからです。しかし京都に来て知ったことは、京都も先の戦争で爆撃を受け死者もいたという事実でした。また、小学校に上がるまで長崎に住んでいたわたしは、日本で最初の殉教者といわれる長崎二十六聖人は長崎のキリシタンとばかり思っておりました。事実は、京都で捕らえられ見せしめのために八〇〇キロの道のりを長崎に連れて行かれ、処刑された人たちだったのです。この程度の認識で京都の伝道をしてきたのかという反省に自分の信仰が問われました。

生活感のない信仰のむなしさを知らされたわたしは、以後十年、室町の繊維会社に勤めながら牧師を続けました。そんな日々のなかで、もう一度「聖書」を読み直し、礼拝や説教のあり方や言葉を自明のこととせず、考え直してみたいと願ったのでした。

平和たらしめるもの

今期の主題であるマタイによる福音書の「山上の説教」についても、平和を築くための運動と単純に決めつけない方がよいでしょう。もう一度別の視点で聖書を読み直してみることが重要でしょう。マタイによる福音書の四章の後半は、多くの民衆が癒しを求めてイエスのもとにきたので、彼らを癒された(四章二四節)とあり、この群衆を見て、イエスは山に登り人びとに語られたと五章に続きます。「心の貧しい人々は、幸いである」という言葉で始められているように訳されていますが、原文はすべて「幸いである」という呼びかけで始まっています。この強調の意味するところから考えると、「平和を実現する人々」への勧めや招きというより、助けを求める群衆への呼びかけと考える方がよいのではないのでしょうか。彼らが求める癒しに勝る大切なことがある。それは、どんなときにも人に寄り添い神のみ国に生きる約束を告げられる方、主キリストが共にいてくださることの幸いに気づくことではないか、ということです。

先に読んでいただいたルカによる福音書、徴税人ザアカイ物語は、そんな信仰のあり方を教えているように思います。ザアカイは子どもがするように木に登ってイエスを待ちました。しかし声をかけたのは彼ではなく、ザアカイを見上げて呼びかけられたイエスの方でした。

「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい」と。

ザアカイは、言われるとおり急いで木から降りて来て、主イエスを家に迎えました。見ていた群衆の驚き。そして、ザアカイの告白です。「主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します」。

平和を実現するとは、目立つような「運動」ばかりではないでしょう。運動からは、ともすれば独り善がり走到了り、上から目線の高慢が起こったりしがちです。本当の平和は、そんな視点からではなく、寄り添う隣人の温かさに呼び覚まされた人間の熱い想いから、告白するように沸きあがってくるものかもしれないと教えられます。

土着化から実生へ

わたしが牧師になって京都にきたころ、福音の土着化という言葉がよく使われていました。わたしも共感しておりました。特に京都という土地では実感がありました。しかし、今は違う考えをもっております。西欧で育てられた苗(なえ)を、風土の違うアジアの地に根付かせることは容易ではありません。ザビエルによるキリスト教渡来から五〇〇年経っても、日本人人口のパーセントを越えられないのです。性質の異なる土地に苗は根を張ることができないです。それが自然の営みだからです。しかし主は「種を蒔け」と言われました。命をもった種は根を出すでしょう。根付かせるのでなく、種白らの力が芽生え、根を張るのです。もし芽が出ないなら土が適していないのですから土を改良すればよいのです。そうして育ったものを実生(みしょう)と言います。福音の実も同じでしょう。神のことば(・・)の実生化です。東洋の風土には東洋人の心に響くことばがあるはずで。病める人を癒された主イエスのことばのように、ザアカイを造り変えた命のことば、寄り添って、その人を幸いな者としていく実生の福音こそが求められているのではないのでしょうか。

西アジアで種まかれたいのち(・・)の実が、遠くシルクロードを渡って東アジアの日本の地に芽生えてくる、それは本当に感動的なことです。和歌山県の高野山には、開祖・弘法大師空海を祀る奥之院の一角に、「大秦景教流行中国碑」と刻まれた石碑が、明治時代に建てられ今日まで残っています。これは、空海が中国長安に密教を学びに渡ったおり、近くにあった景教寺院「大秦寺」に建っていた石碑の模造品ですが、実物を空海も見ただろうと考えられています。景教とは中国に伝わっていたキリスト教の一派で、石碑には聖書の物語が記されております。空海は聖書を読んだのでしょうか。それを知る術はありません。しかし空海の教えはキリスト教と共通しているところが多く、その関係が想像できます。

ヨハネによる福音書一章は記します。

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった」(ヨハネによる福音書一章一節)。

空海が高野山に開いた宗教は「真言宗」です。石碑は空海と景教とのつながりを記念して、ある学者が高野山に贈ったものですが、もし、これが事実であれば、聖書の文化はザビエル以前に日本に渡っていたということになります。空海もキリストの福音にこそ打たれた一人であったのかもしれない。

対話がもたらす希望

近年、宗教間の対話が求められる時代になりました。表面的な話し合いで平和を見せかけるのではなく、深く教えの真実が学ばれ、人類の平和を希求する働きであって欲しいものです。日本は三月十一日に東日本における大地震と津波で、あまりにも大きなものを失いました。加えて原発の破壊による被害は、日本の未来に及ぶ大きな傷跡をさらしています。今日ほど人間のことばが強く感じられる時代はありませんでした。今こそ人間にとって平和の内実が問われているのでしょう。すべてを奪い去られても、なお未来を切り拓く希望を見いだしていかなければなりません。

「幸いである。神の国はその人たちのものである」と告げられ、先立ち行かれた主イエスに従っていきましょう。